

松本市文化財調査報告 No.98

MIYA NO UE

松本市宮の上遺跡Ⅰ

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会

MIYA NO UE

松本市宮の上遺跡 I

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会

序

女鳥羽川流域の原・洞地区は、縄文時代から中世にわたる様々な時期の遺跡があることで知られてきました。この一帯は、古代官道の東山道の通過地点と目され、また西隣の岡田地区の丘陵地帯では、奈良時代から平安時代にかけて、多数の窯が設けられ、盛んに須恵器生産を行ったことは古く識者の指摘するところでもあります。このように当地域は、松本の古代を探る上で重要な場所であった訳ですが、一方、現代に視野を転じると、これまた松本の市街地に北接する住宅地として、近年、著しい脚光を浴び、各種の開発も相次いでいるという状況でありました。

今回の発掘調査は、原地区の宮の上遺跡一帯に計画された宅地開発に伴うもので、開発関係者各位の遺跡に対するご理解も深く、発掘調査の必要性も快くご了承いただけて、円滑に事業は進行致しました。その結果、平安時代の住居址3棟が発見され、たくさんの土器が出土するという成果を収めることができました。調査内容の詳細は本書に述べるとおりではありますが、古代における当地域の重要性の片鱗をのぞかせるものになったのではないかと、期待するところでもあります。今後も続く、当地域一帯の発掘調査への布石となり、本書を期に、一層の遺跡への関心が高まれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査実施にあたって多大なご理解とご援助をいただきました、(株)松本平開発、地権者、原町会、地元関係者の皆さんと、つらい作業に従事していただいた発掘参加者の皆さんに、心から感謝の意を表して序といたします。

平成4年3月

松本市教育委員会 教育長 松村好雄

例 言

1. 本書は平成3年4月23日から6月19日にかけて行われた、松本市大字原150番地一帯に所在する宮の上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は松本市が株式会社松本平開発から委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆分担は、Ⅰ：事務局、Ⅱ-1・2・1・3：今村克、Ⅱ-4-(1)：竹内靖長、Ⅱ-4-(2)・(3)：関沢聡、その他と編集は直井雅尚が行った。
4. 本書に使用した写真の撮影は、調査地・遺構については今村克が行い、遺物については宮嶋洋一氏にお願いした。
5. 本書に掲載した図類の縮尺は、特別な記載がないかぎり、住居址・土坑1/80、土器・陶器：1/4、鉄器・石器：1/3、石器（小形）：2/3となっている。
6. 現場で作成した測量図類、遺物の実測図類は、業務の委託契約書、作業日誌等の書類とともに松本市教育委員会が保管している。

目 次

序

例言・目次

Ⅰ 調査の経緯

- | | |
|-----------|---|
| 1 調査に至る経過 | 1 |
| 2 調査体制 | 1 |

Ⅱ 調査結果

- | | |
|------------|----|
| 1 遺跡の位置と地形 | 4 |
| 2 調査の概要 | 4 |
| 3 遺構 | |
| (1) 住居址 | 4 |
| (2) 土坑・ピット | 11 |
| (3) 溝 | 11 |
| 4 遺物 | |
| (1) 土器・陶器 | 12 |
| (2) 鉄器 | 14 |
| (3) 石器 | 14 |

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

今回の調査は、株式会社松本平開発が当遺跡の一带に宅地開発を計画したことに始まる。平成3年1月8日に、宅地開発に伴う埋蔵文化財についての照会をうけた当教育委員会は、文化財保護法第57条の2の届出をすること、発掘の実施にあたっては調査期間と調査費用が必要となることの3点を要請した。同月28日には、先の要請に沿って、文化財保護法第57条の2（届出）を長野県教育委員会に提出し、引き続き4月12日に「原地区宅地開発に伴う宮の上遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約」を、松本市と株式会社松本平開発の間で締結した。

この間、当教育委員会では3月30・31日の両日、開発予定地内の試掘調査を行い、遺構の分布範囲の確認を行った。4月15日には宮の上遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、同月23日から緊急発掘調査を開始した。

以後、6月29日に埋蔵文化財発掘調査終了届（通知）と、埋蔵文化財拾得届および同保管証を提出。7月15日に宮の上遺跡埋蔵物の文化財認定通知が届いた。

2. 調査体制

調査団長 松村好雄（松本市教育長）

調査担当者 今村克、直井雅尚（社会教育課）

発掘作業参加者

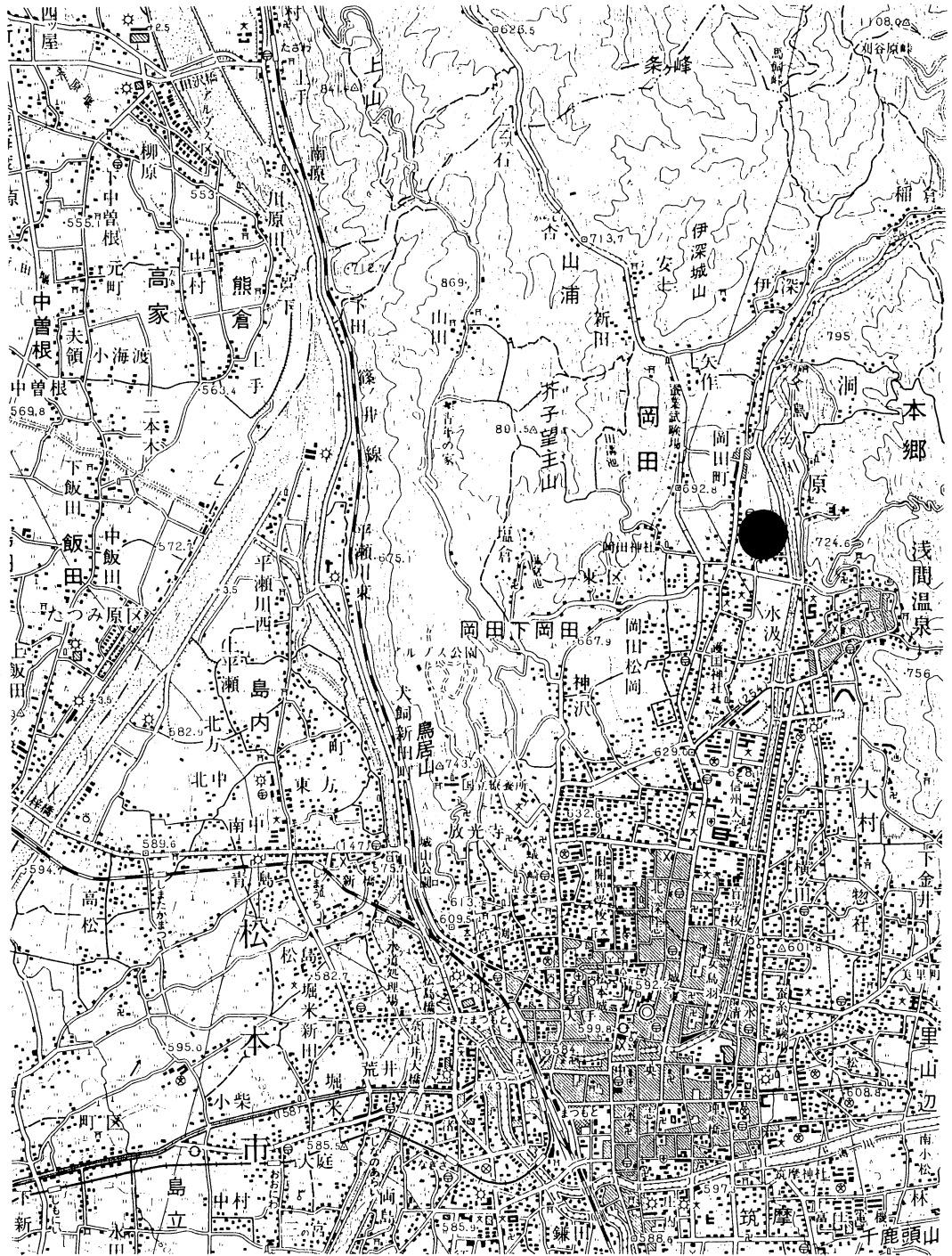
赤羽包子、飯沼重子、飯沼忠、池田穂積、大久保たつ子、大沢ちか子、大堀一雄、上条ため子、小池愛子、小岩井美代子、寺島貞友、深井美登利、藤井源吾、藤井久子、藤井マツエ、藤沢ミツ、矢沢うめ子、山口幸子、横山恒雄、横山真理、吉江園子、吉江孝子

整理作業参加者

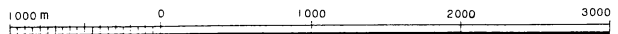
内沢紀代子、内田和子、開鳴八重子、上條益子、田多井亘、中島千矢子、中島好子、丸山恵子、百瀬一子、横山小夜子、横山真理、横山保子

事務局

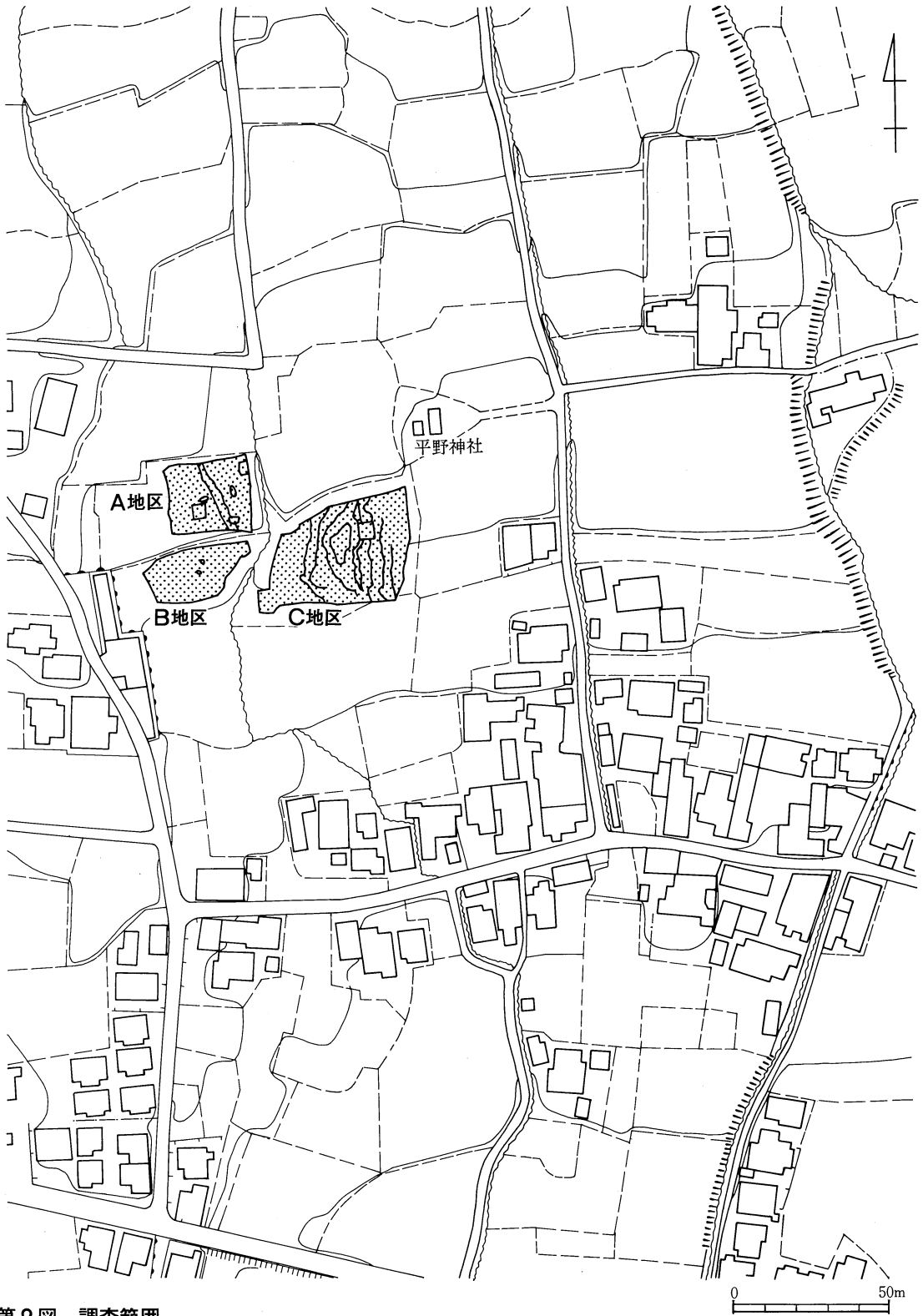
荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐・文化係長）、熊谷康治（課係長）、関沢聡（文化係主事）、直井雅尚（同）、荒井由美、山岸弥生



● 宮の上遺跡



第1図 遺跡の位置



第2図 調査範囲

II 調査結果

1 遺跡の位置と地形

本遺跡は松本市原に所在し、今回の調査地は平野神社西側に近接する（第2図）。周辺は宅地化が徐々に進んではいるが、現況は北から南に向かう緩傾斜の水田と畑地になっている。地形的には遺跡の東方を南流する女鳥羽川によって形成された右岸の河岸丘上に位置し、現在の女鳥羽川の河床とは約6mの比高差を有する。

本遺跡西方の、南北に延びる低い尾根状地形の上には、一部に縄文時代を含み、奈良・平安時代を中核とする遺跡群が展開している。本遺跡は、これらとは若干立地を異にするが、時期的な類似からみて、その一翼に連なるものといえる。

2. 調査の概要（第3図）

遺構の分布範囲等の確認のため、本調査に先立ち、平成3年3月に開発対象地全域について試掘調査を行った。この結果、対象地北部に設定した試掘坑4か所からは、土器片・石器の出土を認められたが、一方、南部では各坑で拳大～人頭大の礫層が全面的に観察され、遺構検出の可能性は開発対象地の北側が高いと判断した。これに基づき、A～C3か所の調査地区を設定し、同年4月23日より重機による表土剥ぎ、作業員による検出、遺構の掘り下げ等の作業を順次行った。

調査面積はA地区531㎡、B地区385㎡、C地区1175㎡の計2091㎡を測る。検出された遺構は、住居址3軒、土坑5基、ピット18基、溝7本（6本は自然流路）で、住居址がいずれも平安時代に属する他は、時期の推定ができない。遺物は、3軒の住居址内から出土した該期土器が主体で整理用コンテナ3箱、それ以外は鉄器1点、石器3点のみである。

3 遺構

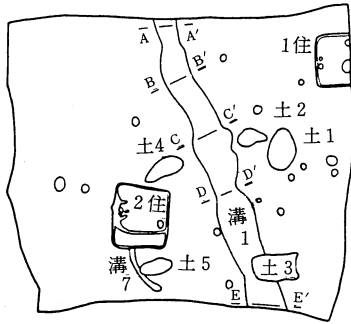
(1)住居址

① 第1号住居址（第4図）

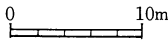
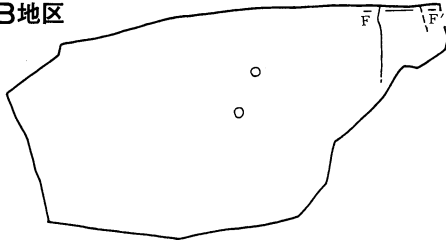
A地区東側に位置し、東部が調査区域外にかかる。規模・平面形は、南北3.8m、東西は不明だがおそらく同程度の隅丸方形プランが想定される。壁の掘り込みは垂直に近く、いずれも20cm前後の壁高を測る。床は、礫を多く含む褐色土の地山を床面とした。貼り床の痕跡はない。住居内施設はピットが4個発見されたのみで、カマドの存在は確認できなかった。おそらく東壁一帯に設けられていたであろう。ピットは規模に大小があり、配置プランおよび断面観察の結果では、柱穴と認められる根拠は得られなかった。また、中央南寄りのP₄に伴って直径30cm程の範囲に焼土が確認されたが、カマドに関わるもの等の性格は不明である。

本址覆土中央部には一部床面にも達して、多量の拳大～人頭大の礫が集中していた。これらの礫

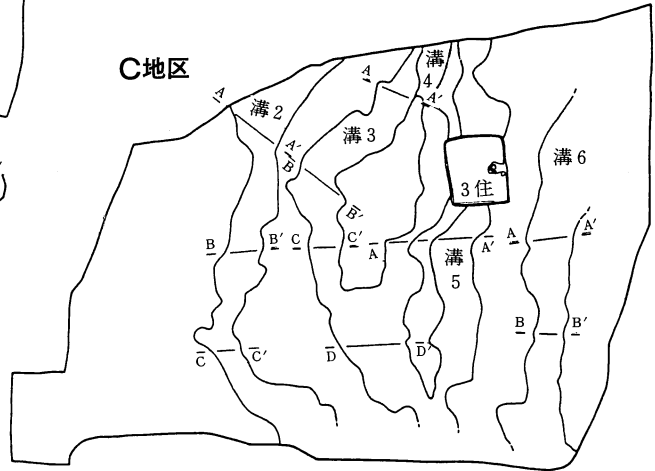
A地区



B地区



C地区



第3図 遺構配置

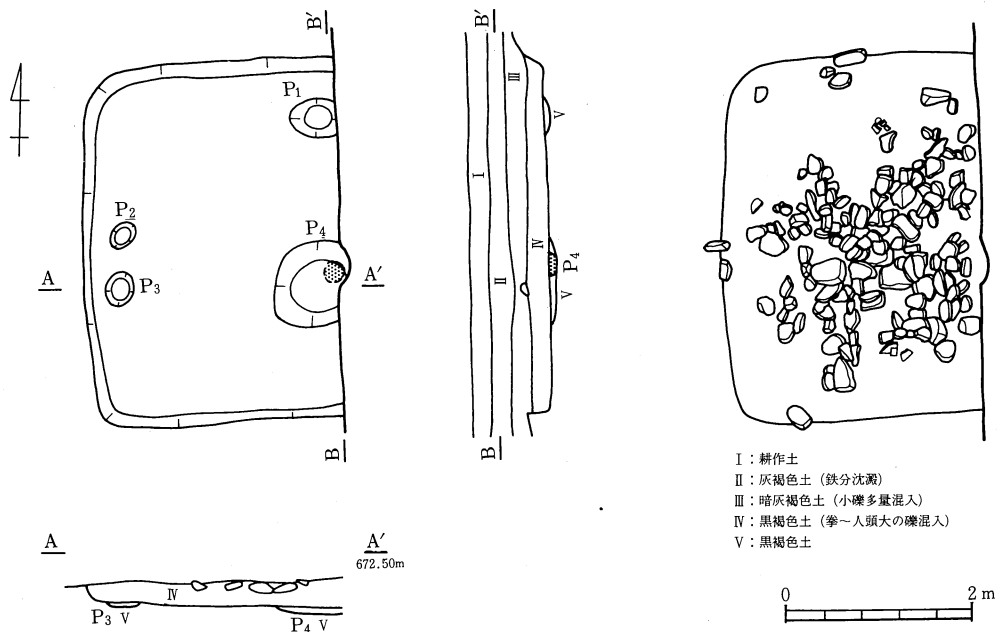
はIII層中には少なく、また堆積状況からみても住居廃絶時に人為的に投入されたと考えられる。

遺物はすべて土器で、須恵器杯、黒色土器A碗、土師器甕・甑、須恵器長頸壺・四耳壺が出土している。出土状況は、第11図1～4・11が中央部の礫集中およびその周囲から、同じく5・6・8・10が礫下部、床面直上から出土した。特に5・8はP₄に伴う焼土の脇からまとまって出土している。本址の帰属時期は、出土遺物から平安時代中頃、7期（次節12頁参照、以下の住居址も同じ）と考える。

②第2号住居址（第5図）

A地区西側に位置し、溝7を切る。規模・平面形は東西4.1m、南北4.4mの隅丸方形を呈す。壁高はそれぞれ東14cm、西18cm、南10cm、北22cmを測る。床は黄褐色土の地山を床面とし、比較的平坦だが、特に固く叩きしめた箇所はない。ピットは1個のみで、55×43cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。カマドは西壁中央にあり、火床とみられる部分に広範な焼土を伴う。袖は芯の石材が抜かれたらしく、僅かな粘質土が残っていた。本址の大きな特徴は、住居南側の床面が高さ15cm、幅1mで一段高くなっていることである。この部分の検出当初は他遺構の重複とも考えたが、南・北壁の線が一致することから、最終的に同一遺構内の段として捉えた。

本址覆土には、I層中に拳大の礫が多数含まれており、これらの間から遺物の出土をみた。この礫と遺物は、自然に流入したとは考えられないが、一方、部分的にII層が壁際堆土（三角堆土）を



第4図 第1号住居址・遺物出土状態

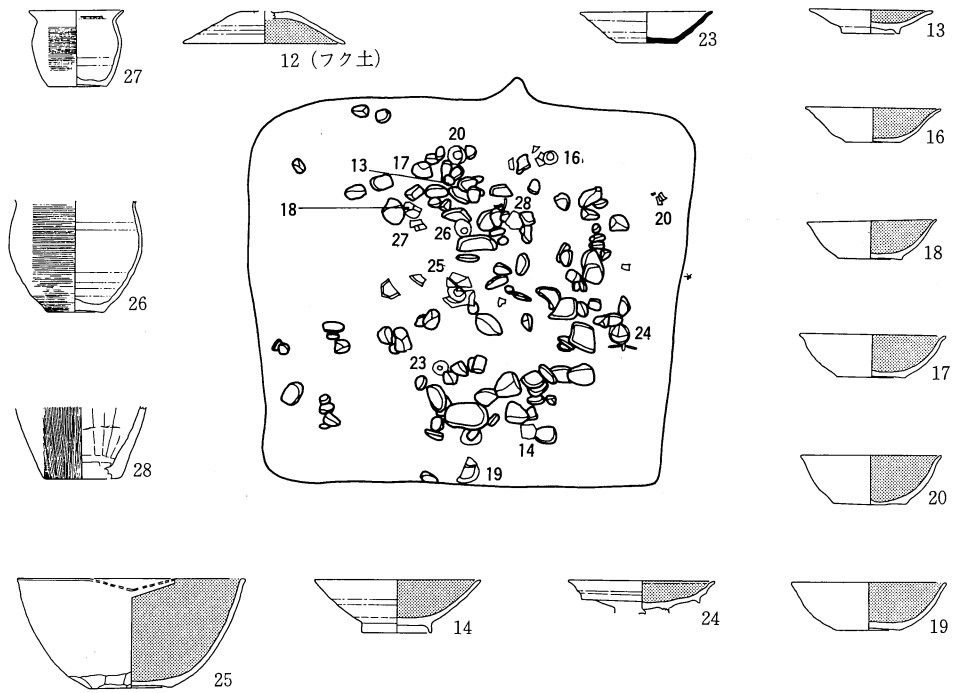
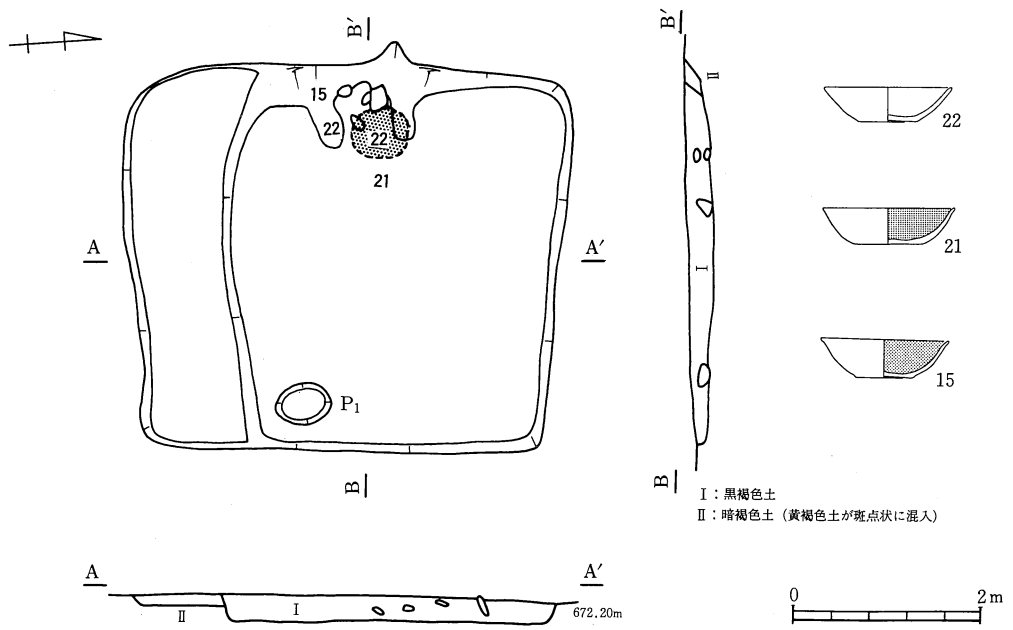
形成する点から、住居廃絶後、若干の時間経過の後に人為的に廃棄されたと推定する。

遺物は、土器と鉄器（紡錘車1点）で、土器は土師器杯・椀、黒色土器A杯・高盤（第12図24）・蓋（同12）・鉢、土師器甕が出土している。出土状態は、住居址西側のカマドおよびその周辺から主だが、特に偏在する傾向はない。遺物の残存状況は良く、17点を図示することができた。本址の帰属時期は、出土遺物から平安時代中頃、8期と考える。

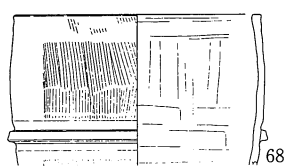
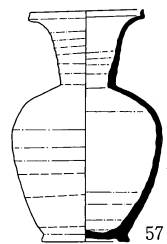
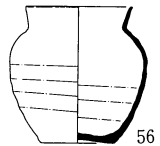
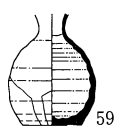
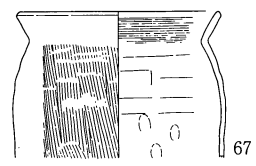
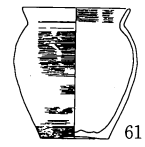
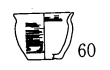
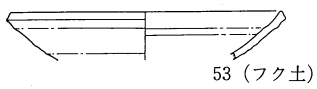
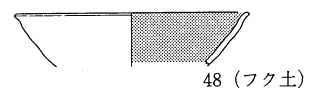
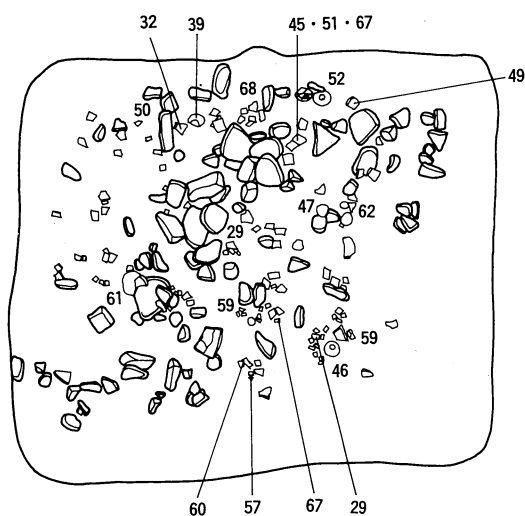
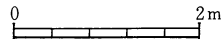
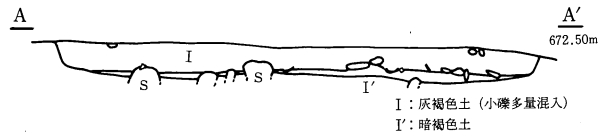
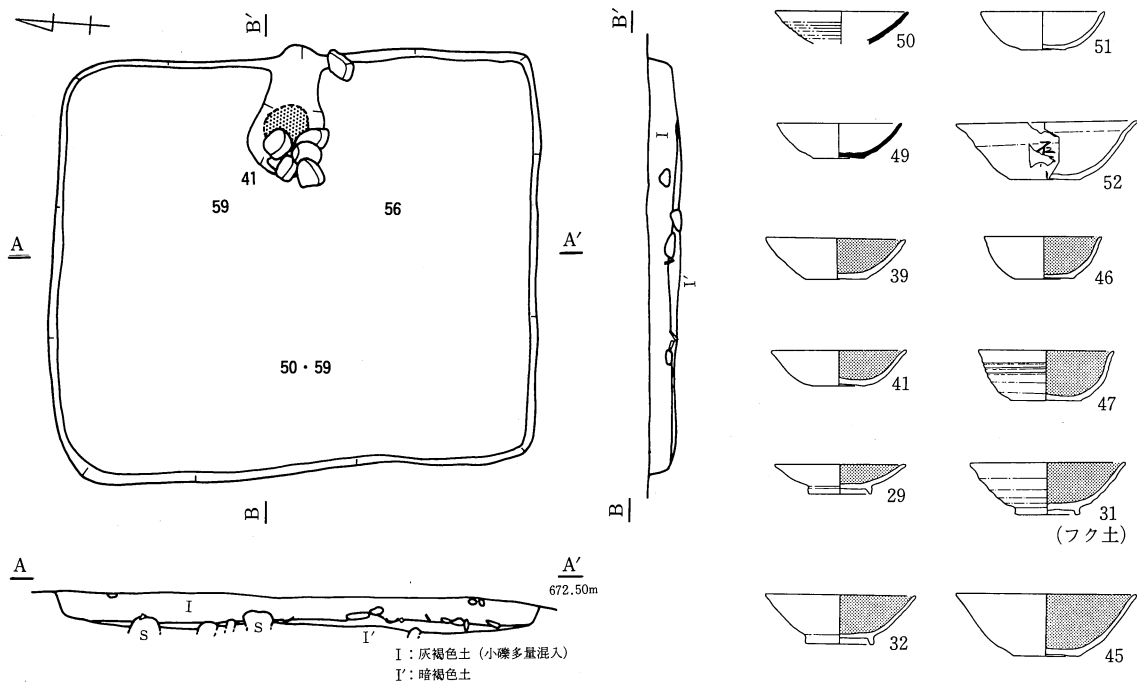
③第3号住居址（第6図）

C地区北東部に位置し、溝4と溝5を切る。東西4.4m、南北5.0mの隅丸長方形を呈し、東壁25cm、西壁30cm、南壁32cm、北壁30cmの掘り込みを持つ。床面は礫混じりだが比較的平坦である。ピット、柱穴は確認できなかった。カマドは東壁中央にあり、焼土と被熱した礫を伴う。袖の残りは悪いが、構築材と思われる礫が多数あることから石組カマドあるいは石組粘土カマドと考える。

本址の検出は、一帯に広がる溝4・5の黒褐色の覆土により、困難を極めた。土器片の出土から本址の存在は予測されていたが、最終的に四方にサブトレンチを延ばして壁の立ち上がりをつえ、プランを確定した。また、本址覆土にはカマドから崩れた石材を中心に、多数の大小礫が散在し、遺物はその間に混じって多数の出土をみた。礫と共に投棄されたのだろう。

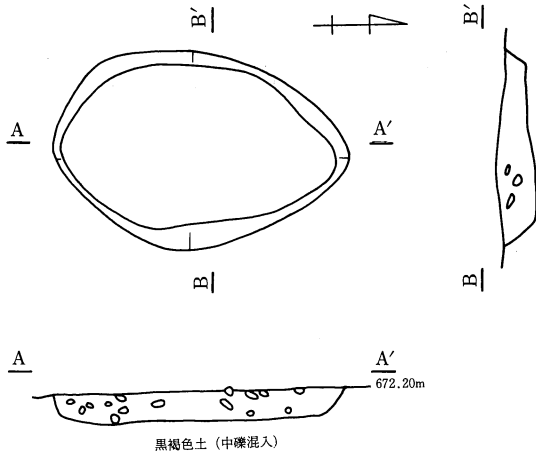


第5図 第2号住居址・遺物出土状態

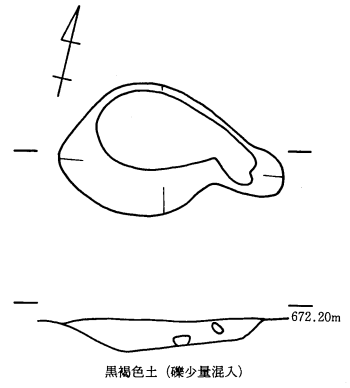


第6図 第3号住居址・遺物出土状態

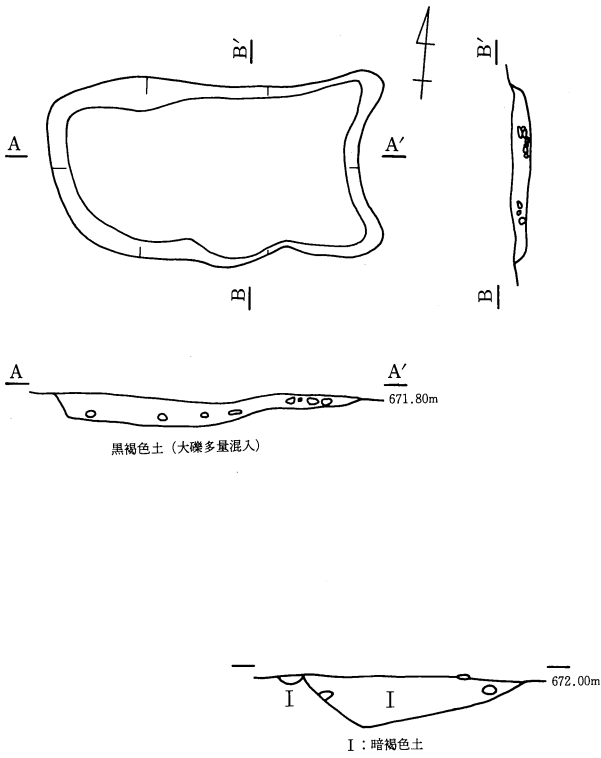
土坑 1



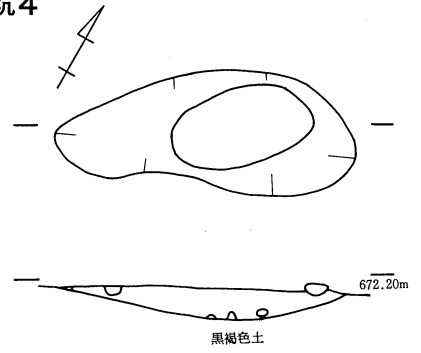
土坑 2



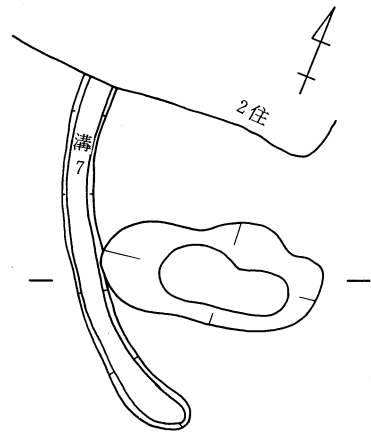
土坑 3



土坑 4

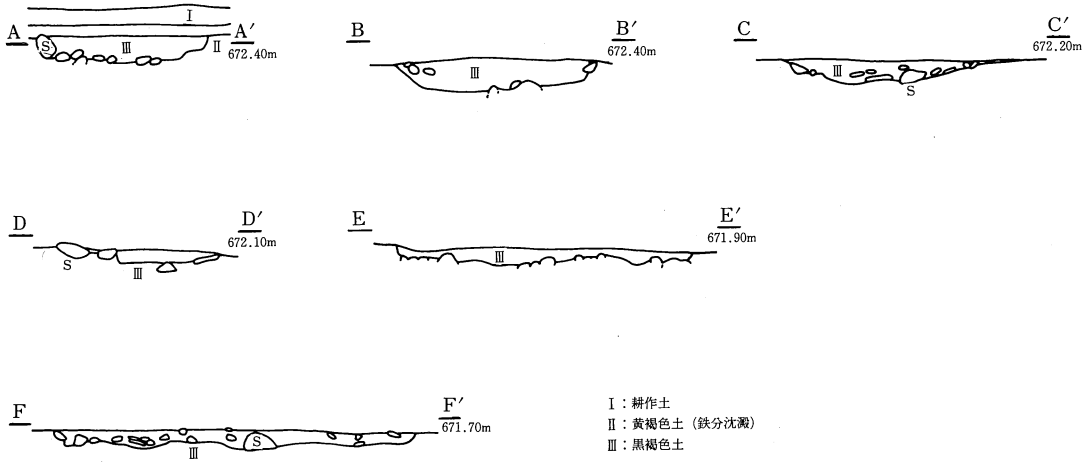


土坑 5

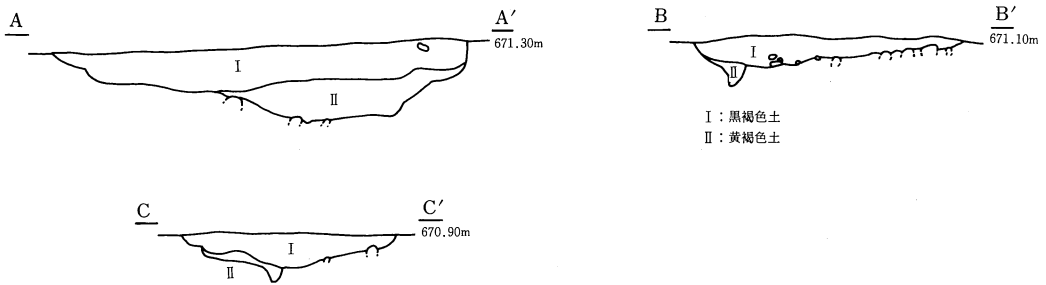


第7図 土坑

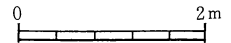
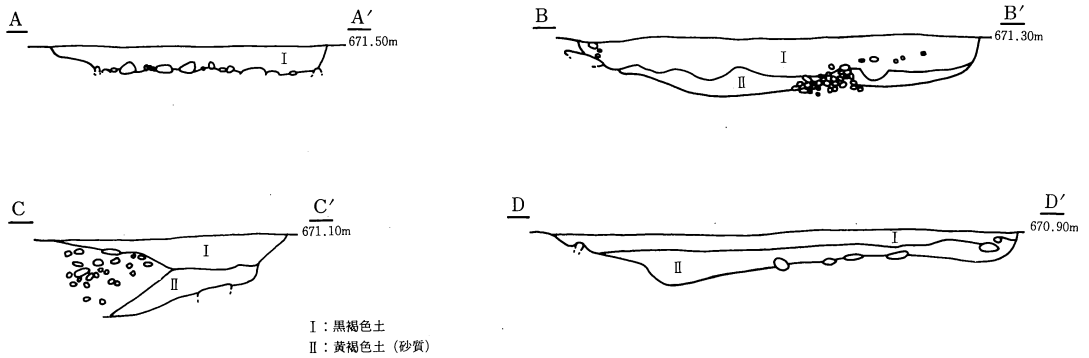
溝1



溝2

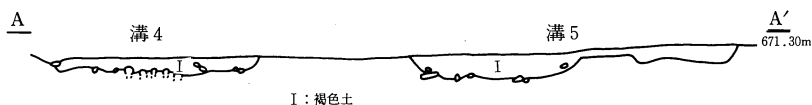


溝3

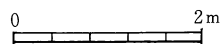
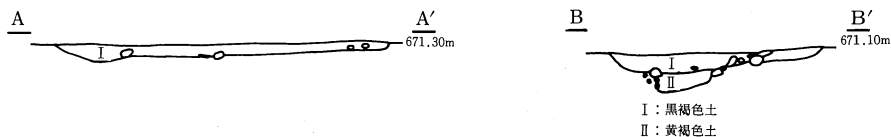


第8圖 溝断面 (1)

溝4・5



溝6



第9図 溝断面 (2)

遺物はすべて土器・陶器類で、須恵器杯、土師器杯・鉢（第13図52）、黒色土器A皿・杯・碗・鉢、須恵器短頸壺・長頸壺、土師器甕・甑・筒形土器（69）、灰釉小瓶がある。その他、弥生土器小片が1点出土している。本址の帰属時期は、出土遺物から平安時代中頃、8期と考える。

(2) 土坑・ピット (第7図)

土坑は5基(すべてA地区)、ピットは18個(A地区P₁～P₁₆、B地区P₁₇～₁₈)が検出された。

土坑はいずれも1～3m前後の径を持つ不整な長方形や円・楕円の平面形を呈し、壁の傾斜も一様ではない。底面に凹凸の著しいものが多く、土坑1～4の覆土下部～底には多数の礫が存在したが、地山の礫との区別がつけにくい場合もあった。遺物の出土は皆無で、帰属時期や性格・用途の想定は困難である。あるいは風倒木痕に類するものだったのかもしれない。

(3) 溝址

A地区に2本(溝1・7)、B地区に1本(溝1)、C地区に5本(溝2～6)が検出された。溝1はA地区中央を北から南に流れてB地区に及び、幅1.8～3.8m、深さ23～40cmを測る。平面形や土層から自然流路と考える。溝2～6はC地区全体に広がる自然流路で、いずれも覆土は礫の少ない黒褐色土となる。遺物は溝2から打製石斧が1点出土しているのみである。これらの溝の帰属時期は、溝4・5が第3号住居址に切られる点から平安時代中期以前は確かだが、縄文時代に遡るとも明言できない。溝7は幅30cm、深さ10cmを測り、他とは異なり明らかに遺構であるが、性格は不明である。

4 遺物

(1) 土器・陶器 (第11～14図)

① 概観

今回の調査では、遺構内外から9世紀後半の良好な資料を得ている。ここでは、住居址等から出土した土器70点を図化・提示した。出土した土器・陶器の種類は、黒色土器A・土師器を中心に少量の須恵器・軟質須恵器、微量の灰釉陶器で構成される。なお、器形・年代観については文献1を参考にした。

② 各住居址の土器群

第1号住居址

11点図化した。黒色土器Aを中心に土師器、須恵器がある。時期は、埋文センター編年の7期に対応すると考えられる。

黒色土器A：3・4は椀、2は杯である。4は口縁端部が僅かに外反し、高台外面下部に僅かな稜をもつ。

須恵器：1は杯である。底径が小さく、体部が上方へ八の字状に開く。貯蔵具は、10の四耳壺、11の壺類がある。

土師器：甕（5～8）、甑（9）がみられる。

第2号住居址

17点提示した。黒色土器Aを中心に土師器・須恵器がみられる。時期は埋文センター編年の7～8期と考えられる。

黒色土器A：杯Aは15～19・21の6点ある。法量を比較すると、A I（口径13.4～14.8cm・器高3.8～5.1cm）とA II（口径16.2cm・器高5.2cm）の大小2種にわかれる。内面の調整は、縦方向のヘラミガキを基本としているが、ミガキの間隔が粗い。椀は14の1点のみみられる。体部下半に回転ヘラケズリを施している。12は、蓋である。内面はヘラミガキの後に黒色処理し、天井部は回転ヘラケズリを施している。端部は須恵器蓋のようにかえりがなく外反する。24は高盤である。内面は磨かれ、黒色処理されている。脚部は欠損しているが、4単位の透かしが僅かに残存している。体部外面中央部には、1条の突帯が巡っている。他に皿B（13）、鉢A（25）が出土している。

土師器：22は杯である。底部に回転糸切り痕が残る。口径13.2cm、器高3.6cmを測る。煮沸形態では28の甕、26・27の小形甕が出土している。

軟質須恵器：杯Aが1点出土している。灰白色を呈し、体部外面に黒斑がある。

第3号住居址

42点図化している。器種構成を見ると、黒色土器Aを中心に土師器と微量の須恵器・灰釉陶器が見られる。また、混入品とみられる弥生土器片（70）が覆土中より出土している。

黒色土器A：杯Aは法量によりA I・A IIに分けられる。A Iは口径11.8～14.7cm・器高3.5～4.5cm、A IIは口径18.2cm・器高6.6cmを測る。椀は、有台の椀（30～32）と佐波理椀を模倣したとみられる

無台の椀(46・47)がある。47は、ロクロ調整で、底部に回転糸切り痕が残る。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。体部外面には、3条の沈線が施されている。46は47と器形は類似しているが、体部外面の沈線がみられない。他に、皿B(29)、鉢A(48)が出土している。

土師器：鉢(52)・盤(53)・甕(62・64～67)・小形甕(60・61・63)・甑(68)・円筒形土器(69)が出土している。52は鉢である。ロクロ成形で、底部に糸切り痕がみられる。口径19.0cm・器高6.1cmの大形品で僅かに内湾して立ち上がり、口縁端部でやや外反する。内面は、磨かれていない。体部外面には、墨書がある。68は甑である。外面は、ロクロナデの後ハケメ調整を施し、罫部は貼り付けた後にナデている。

須恵器：短頸壺(55・56)・長頸壺(54・57)がある。

軟質須恵器：杯(49)が1点みられる。底部に黒斑が観察できる。

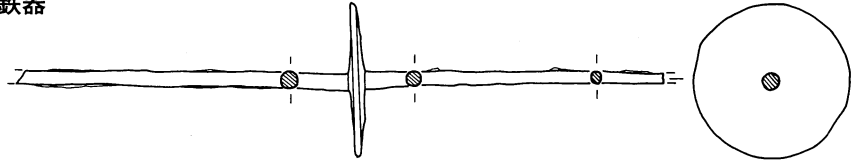
灰釉陶器：小瓶が2点(58・59)出土している。

③ 考察

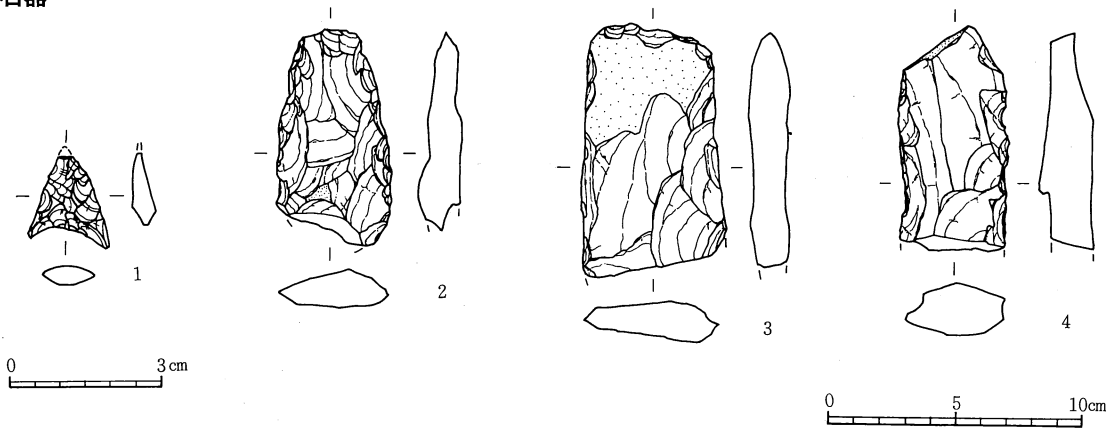
本遺跡にみられる土器群は、文献1の編年観に照らし合わせてみると、7～8期(9世紀後半～10世紀初頭)に比定される。この時期の土器群の様相をみると、食膳具は須恵器を中心とした厳密な法量規格に基づく器種分化の構成から、土師器・灰釉陶器で構成される椀・皿主体の単純な構成へと変化する過渡期であるといえる。この変化は、巨視的には金属器志向型を基調とする「律令的食器様式」から「磁器志向型」への変化としてとらえられる。(文献2)。また、窯業生産の側面からは、在地の須恵器窯の衰退・黒色土器Aの増加がみられる。特に7～8期にみられる軟質須恵器は、器形・成形技法等が黒色土器Aの杯に近いことや、おそらく還元焰焼成に近い方法で焼かれていること、須恵器杯が消滅する時期に出現すること、などからロクロ調整の土師器食膳具生産の母体としての存在が意義付けられるのではないかと考えられる。一方、流通の面からみると広域流通の発達により遠隔地製品が多量に搬入されるようになる。この結果、一般の集落では在地産と搬入製品の複合による食器組成となり、中世的な土器様相へと展開していく。しかし、岡田地区の集落からは搬入品の出土量が際だって少ない。このことは、岡田地区の立地と大きな関わりをもつものと考えられる。

本遺跡が立地する岡田地区西山部一帯は、8世紀～9世紀にかけて松本平最大の須恵器生産地であった。周辺の宮の前遺跡(本年度報告)などは、須恵器生産と密接に結び付いて展開する様相をみせる。須恵器生産が衰退する7～8期以降には土師器焼成坑などが検出されており、須恵器工人集団が土師器生産に携わっていった可能性もある。本遺跡で出土した佐波理椀や須恵器高盤を模倣した黒色土器Aは、前述のような社会現象の産物であろうか。黒色土器A・土師器食膳具類の増加は、須恵器杯類との、「法量による器種の互換性＝等価性」の矛盾を引き起こし、「須恵器生産の必然的なコスト高」と「生産量の低下」から、「その生産をますます困難にしていたもの」と考えられる(文献2)。今後、本遺跡の南西約500mに位置する岡田西裏遺跡(未報告)等の窯業生産を背景にした集落の整理作業が進めば、総合的に解明されるものと期待する。

鉄器



石器



第10図 鉄器・石器実測図

参考文献

1. 小平和夫 1990 「第5節 土器」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』 (財)長野県埋蔵文化財センター
2. 西 弘海 1982 「土器様式とその背景」 『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社

(2) 鉄器 (第10図)

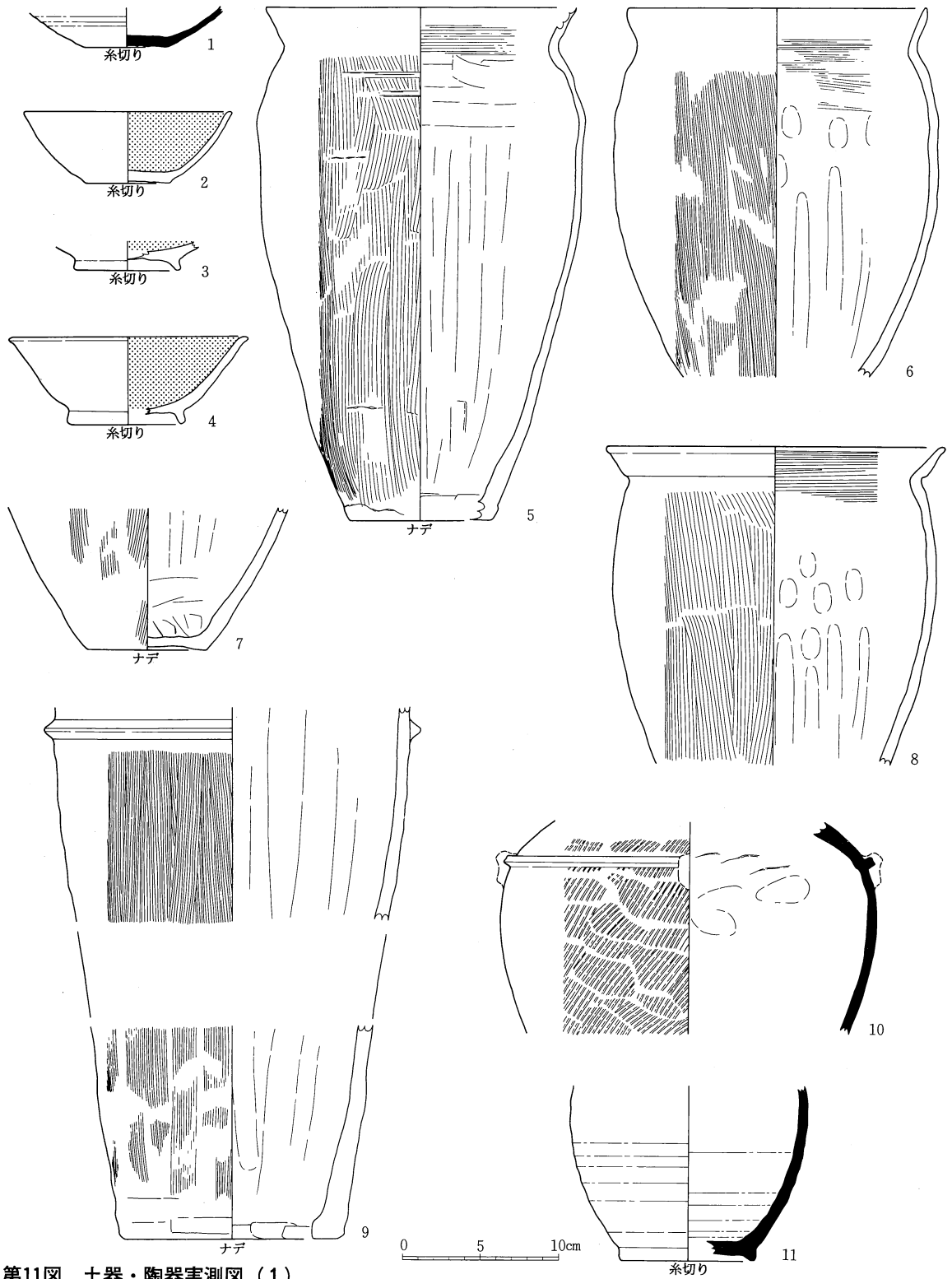
紡錘車が2住から出土している。軸部の両端を破損しているが、残存長25.5cmが認められる。輪部の直径6.1cm、軸の孔径7.1mmの大形品である。

(3) 石器 (第10図)

縄文時代に属する石器が4点出土している。他に試掘時に黒曜石の剥片1点が出土している。文中の寸法は最大長×最大幅×最大厚、重量であり、()は破損している場合の現存値である。

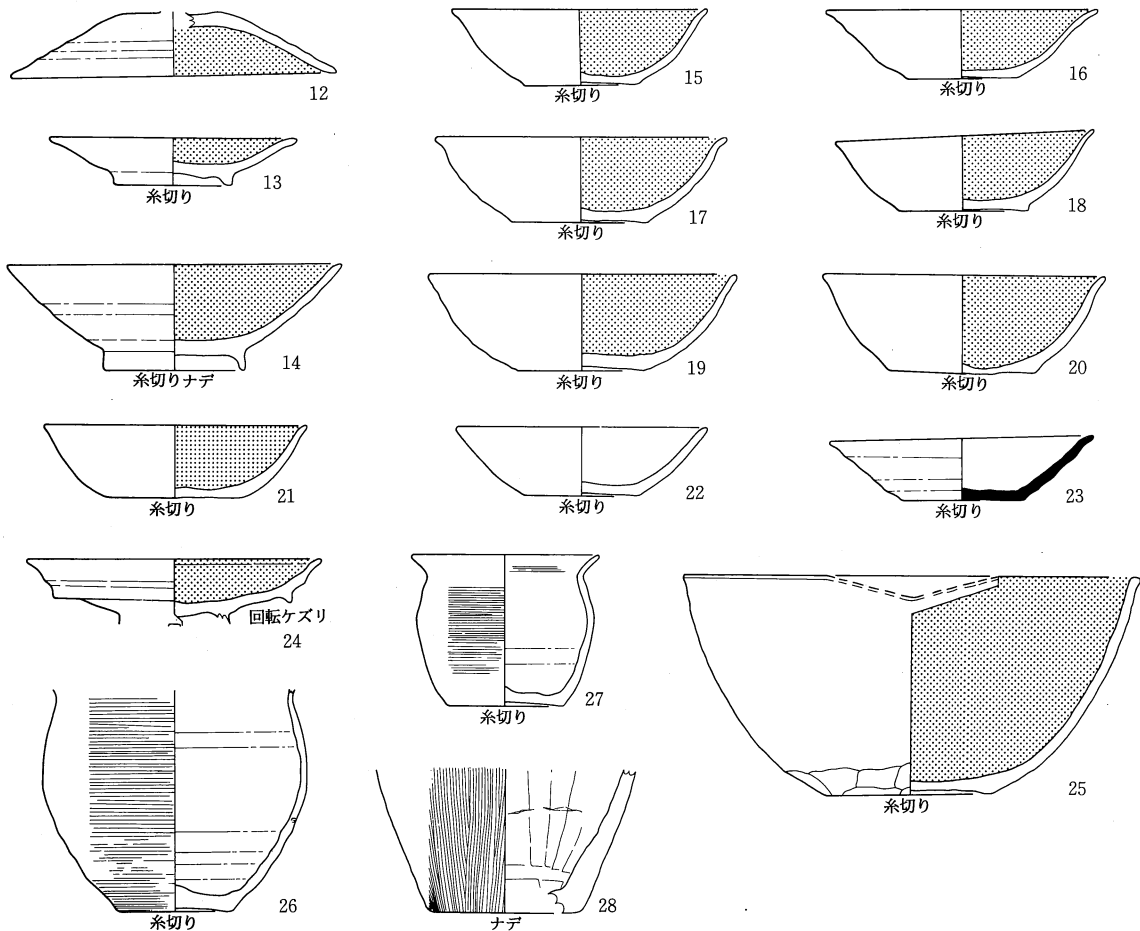
1は凹基無茎鏃で、3住の覆土内から出土している。脚部の長さが不揃いなため、基部は左右対称になっていない。先端をわずかに破損している。(1.86)×(1.58)×(0.49)cm、(0.65)g、黒曜石製。2～4は打製石斧である。いずれも刃部が破損しており、着柄痕・使用痕は認められない。2は溝3から出土、撥形を呈する。(8.50)×(4.45)×1.76cm、(64.7)g、砂岩製。3はA区検出面から出土、撥形を呈する。(9.95)×(5.68)×(1.61)cm、(130.0)g、粘板岩製。4はA区検出面から出土、撥形または短冊形を呈する。(8.96)×(4.17)×(2.17)cm、(101.1)g、砂質泥岩製。

第1号住居址

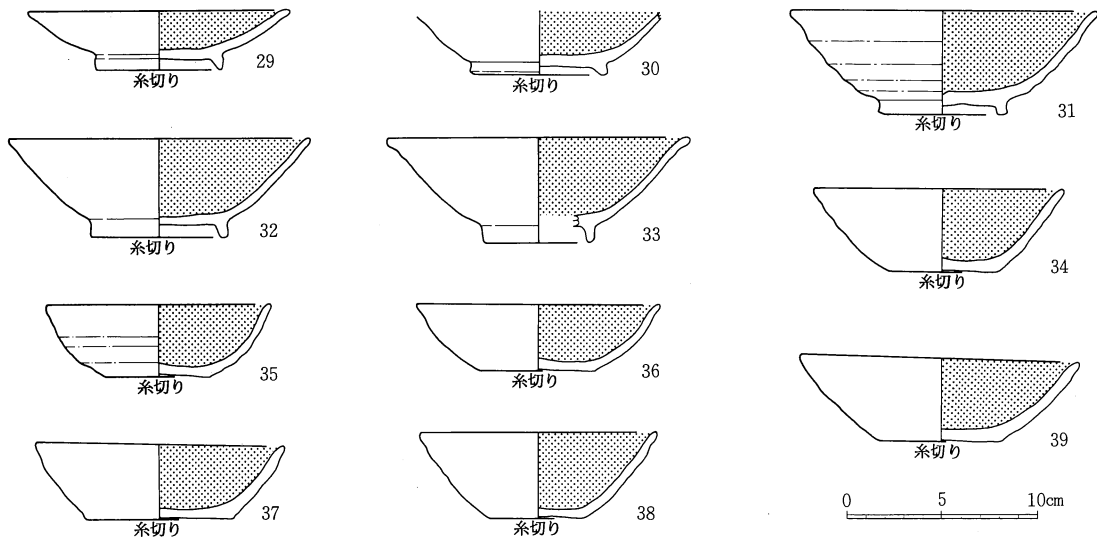


第11図 土器・陶器実測図(1)

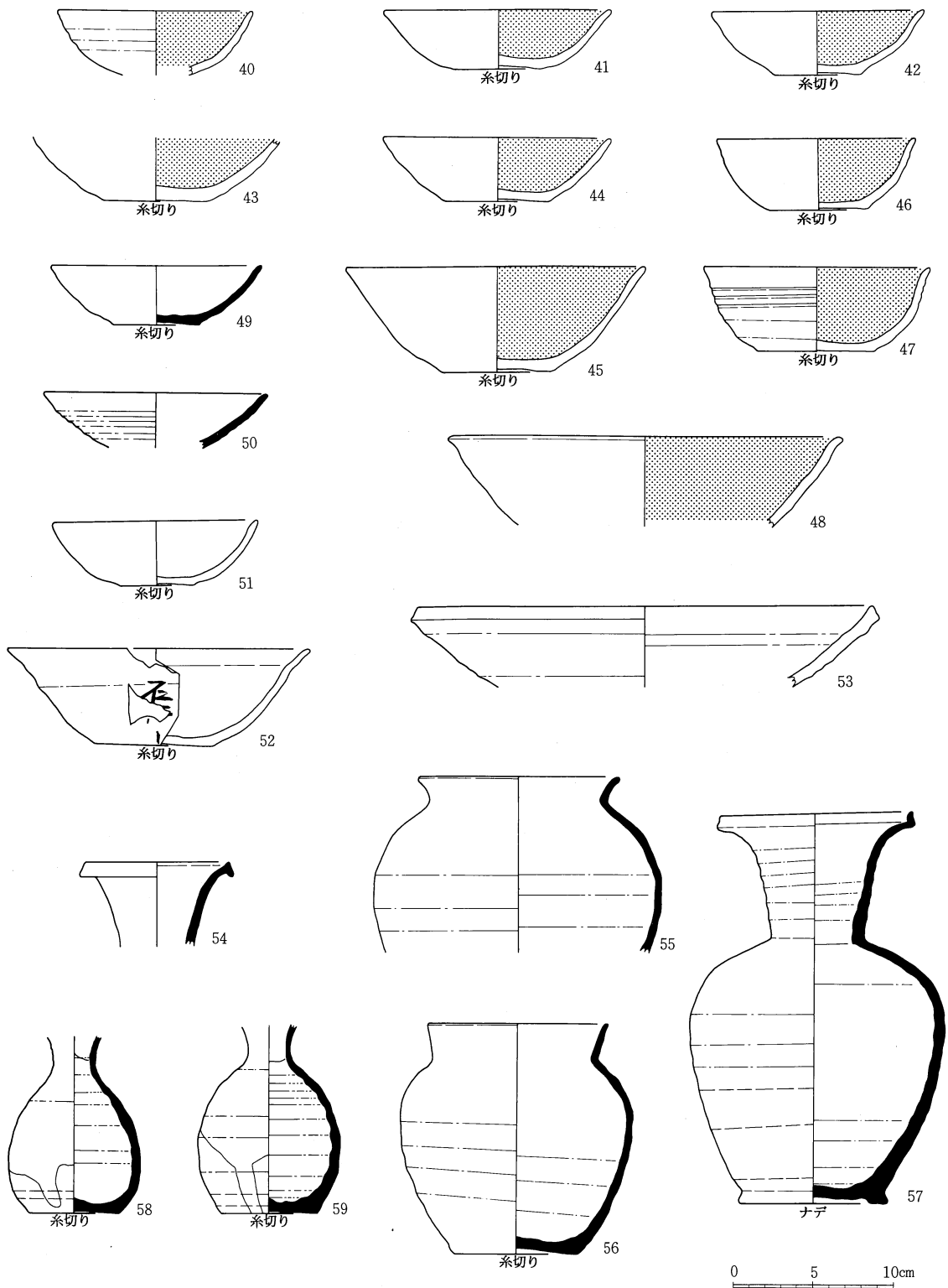
第2号住居址



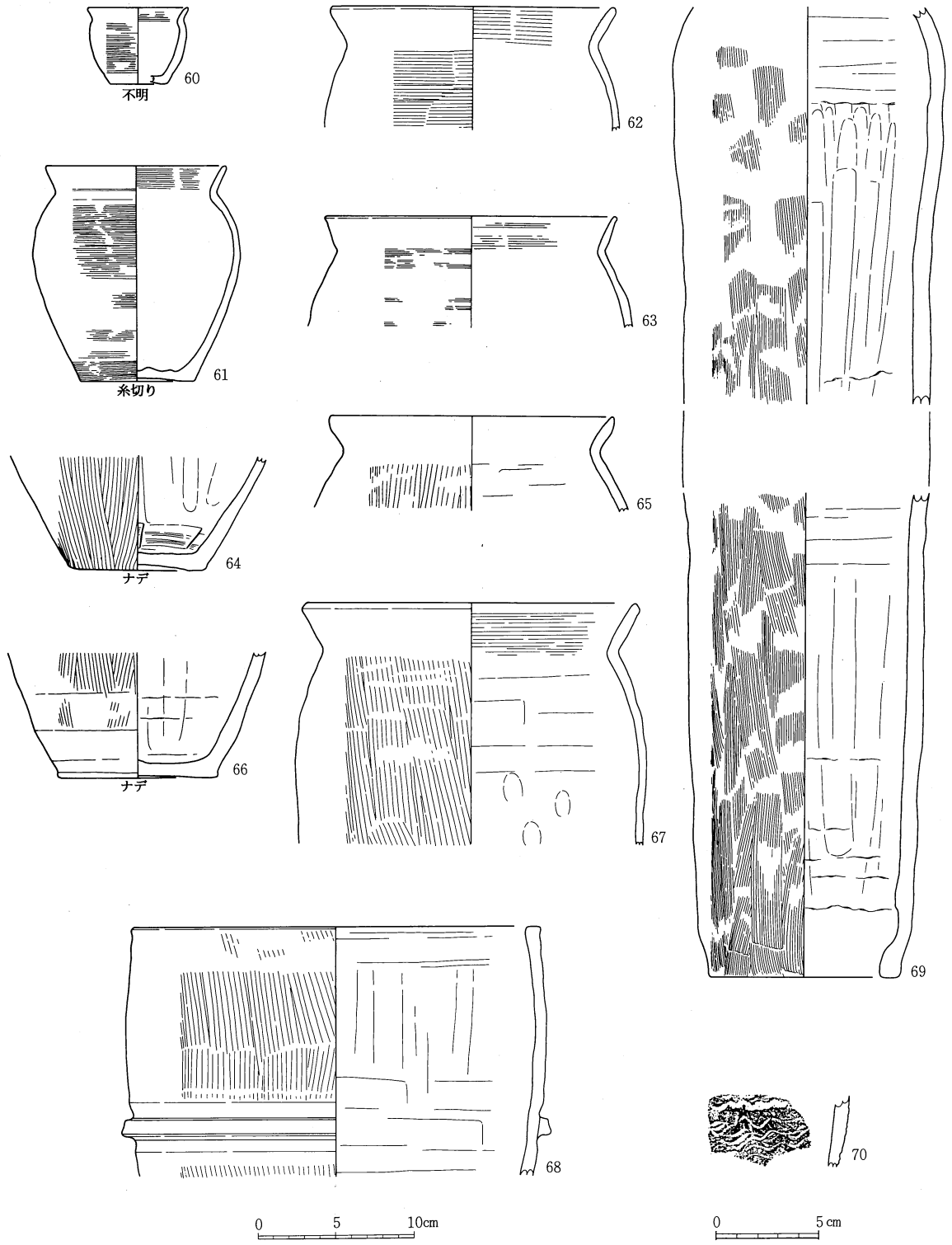
第3号住居址



第12図 土器・陶器実測図(2)



第13図 土器・陶器実測図(3)



第14図 土器・陶器実測図 (4)

版 图



調査地（発掘開始前）



A地区全景



C地区全景



C地区溝2



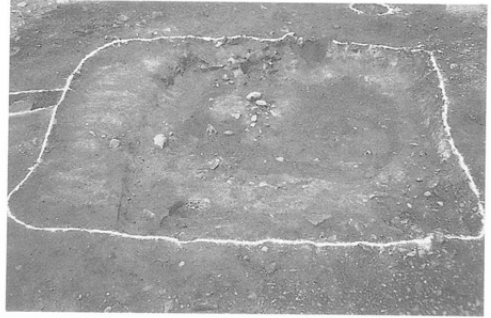
第1号住居址



第1号住居址 礫出土状態



第1号住居址 土器出土状態



第2号住居址



第2号住居址 遺物出土状態



第2号住居址 遺物出土状態 (紡錘車)



第3号住居址



第3号住居址 遺物出土状態



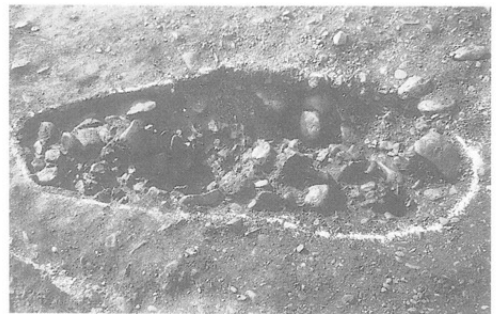
土坑1



土坑2



土坑3



土坑4



土坑5・溝7



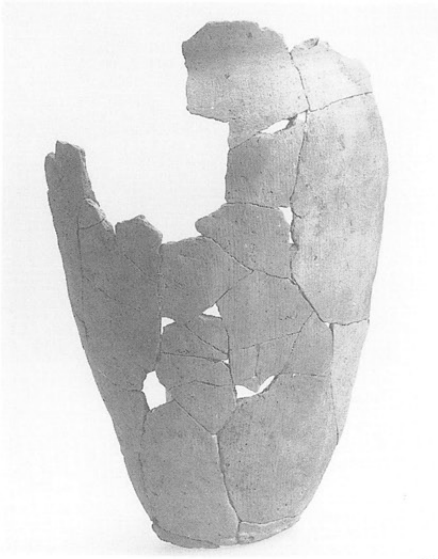
遺構検出作業



2



4



5



12



16



14



13



15

第4図版 土器・陶器 (1)



17



18



19



20



21



23

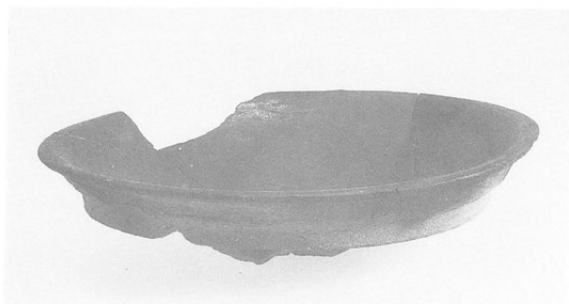


22

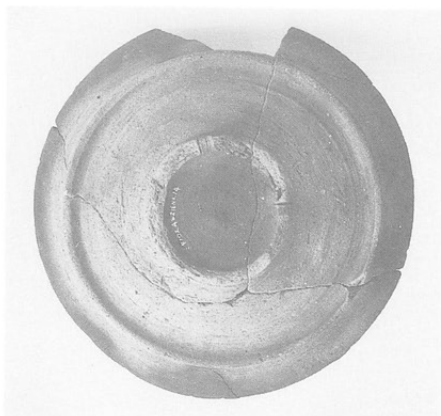


25

第5図版 土器・陶器 (2)



24



24 (裏面)



26



29



27



31



32

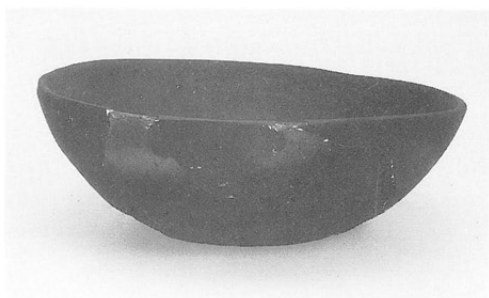


33

第6図版 土器・陶器 (3)



34



35



36



37



39



41



45



46



47



49



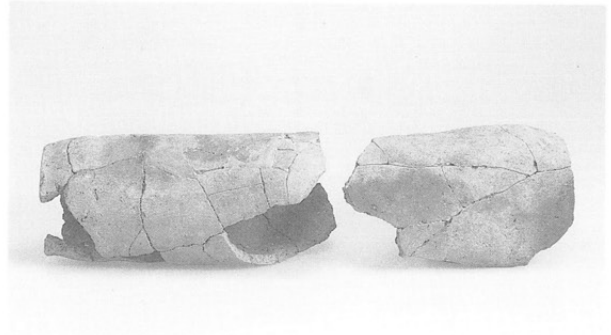
51



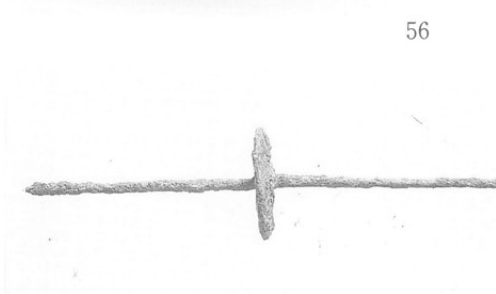
52



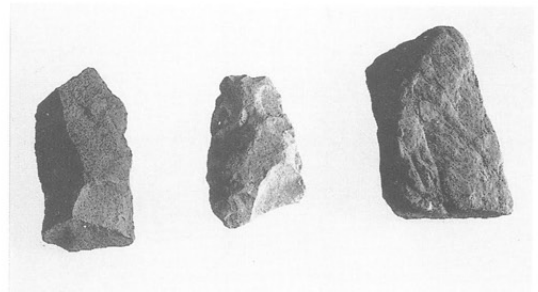
56



69



紡錘車



打製石斧

第8図版 土器・陶器・鉄器・石器（5）

III 調査のまとめ

今回調査の遺跡名「宮の上」の「宮」とは、調査地北東に隣接する平野神社にほかならない。してみると、「宮の上」の名のとおり、神社の上手、北方が遺跡の中心ということになる。実際、今回の調査結果は、北から広がる遺跡の南限を示し、平安時代集落の中核は、より北方にあることを暗示させた。試掘の結果、開発対象地の南部に行く程広がる礫層。調査面積のわりに少なく点在する住居址。これらは皆、そのことを裏付けている。

しかし集落南縁部の住居址にしては、出土遺物は素晴らしかった。土器・陶器の項で触れたように、9世紀後半の良好な土器群が得られたのである。この時期の動向については同項の考察に詳しいが、須恵器等の窯業生産地を大きく形成していた西隣の岡田地区に本遺跡も連なるものであり、生産地ゆえの特殊・希少な器種の存在や、搬入製品の少なさが指摘のとおりであれば、今回の各住居址出土土器群は、生産地近縁での組成の特徴を如実に示すものともなろう。

旧本郷・岡田地区の発掘と整理は緒についたばかりである。本書が、そして本遺跡の内容が、その一つの手掛かり、足下を照らす光明となり得れば幸いである。

松本市文化財調査報告 No.98

松本市宮の上遺跡 I

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月20日 発行

編集 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3-7

Tel 0263 (34) 3000

発行 松本市教育委員会

印刷 精美堂印刷株式会社
